

高校教員のスーパーグローバルハイスクールへの対応と 教育力・意識の変容に関する質的研究

京都大学 服 部 憲 児

序

十数年来、我が国においては、幼児教育から高等教育に至るまで、常に絶え間なく様々な教育改革が行われてきた。とりわけ近年においては、国家の財政難を背景に NPM の考え方が採用され、教育政策においても成果主義が取り入れられ、事前・事後の様々な評価に基づく重点配分もなされるようになってい り。とりわけ数値目標とその達成状況が重視されており、政策立案の段階から成果目標を立て、一定の指標によって評価する方向に進んでいる²⁾。

本稿で取り上げるスーパーグローバルハイスクール（以下、SGH）事業も例外ではない。この事業は「将来、国際的に活躍できるグローバル・リーダーを育成する」ことを目指すものであるが、その公募要領においては予め達成目標を設定することが求められている。そこでは定量目標と定性目標が想定されているが、「達成目標、具体的目標の設定」欄に記載されている 20 項目のうち、明らかに定量目標であるもの（生徒数、生徒の割合、入賞者数、参加者数など）が 17 項目となっている——しかもそれらは短期的な成果の指標である。残りの 3 つのうち 2 つはその他の達成目標と具体的目標であり、量的目標にもなり得るもので、量的指標を中心に評価を行うという意図は明白である。

しかしながら、教育関係事業の成果は数値化できるものだけにとどまらないことは言うまでもない。人としての成長や社会的な波及効果、さらには副次的効果を、量的指標だけで測れるのかは大いに疑問である。また、学力向上も重要ではあるが、それだけではなく、事業が教員、生徒、学校、関係者に対してどのような影響力を持ったのかを把握し、成果を多角的・複眼的に捉え、それを次の改革や制度構築に活かしていくことが必要であると考え。急速な社会の変化に対応すべく様々な教育改革が実施される一方で、事業に対する効果検証の不十分さ、それがなされていても短期的成果しか測定できていなかったり、多角的な評価が欠落したりしている点を改善していく必要がある。

さて、CiNii や J-STAGE で「スーパーグローバルハイスクール」で検索をかけると、表示される論文等は SGH における個々の教育実践の成果に関する研究が圧倒的に多い。SGH 事業全般の成果について取り扱った先行研究としては、川崎将男らによる高校生に対する意識調査があげられる³⁾。この調査では、SGH プログラムの受講生と非受講生間のグローバル意識や行動の差異、SGH プログラムにおける効果性について研究調査がなされており、SGH プログラム受講生の方がグローバルマインドセット・コンピテンシーの得点が高いこと、プレゼンテーションやディスカッション、ディベートのアクティビティが多く、ロジカルシンキングや問題解決の調査方法などの学習方法が比較的少ないこと等が明らかにされている。また、KH Coder を用いた自由記述の分析から、生徒から見た評価の高い点、改善点などが示されている。野田正人は、SGH の指定前後の異同を問うアンケート調査を実施することにより、その学校改善に対する効果の測定を試みている。そこでは、SGH 事業が教員間の支援関係や協

働性の向上や、各種取組の有機的連携などに有効であること、一方でミドルリーダーの活動や個人的実践の共有の進展においては効果が不十分であることを指摘している⁴⁾。

これらの研究においては、いずれも定量的な手法により、SGH 事業の成果を明らかにしているが、野田自身も指摘しているように、そのプロセスや因果関係などは必ずしも明らかになっていない。なお、SGH 事業より先行して実施されたスーパーサイエンスハイスクール (SSH) 事業は、その分成果に関する研究も多いが、取り組んだ教育実践の成果に関する研究、量的分析が中心であるという点で同様の傾向にある⁵⁾。

上述のような問題意識から、またこれまでの関連する先行研究の状況から、本研究は、質的分析方法を用いて、数値では捉えることが難しい SGH 事業の教育成果を、そのプロセスも考慮しながら、多角的・複眼的に明らかにすることを目的とする。後述するように、本稿の分析対象となるのは SGH 指定校の教職員（以下「教員」と表記する）・生徒・卒業生に対するインタビュー調査である。このうち、本稿では教員調査を対象とし、紙面の関係で生徒・卒業生調査は他稿に譲ることとする。ここで教員を取り上げる理由は以下の通りである。学習者である生徒（および卒業生）と教育者である教員とは教育活動の両輪であり、とりわけ学校教育においてはいずれも欠くことのできない重要な構成要素である。にもかかわらず、教育事業の生徒に対する教育効果と比べて、教員に対するそれが注目されることは少ない。SGH 事業に関する先行研究においても、その教員に対する影響についてはあまり注目されていない。上述の野田論文では教師間の関係性や協働性に着目がなされているものの、管理職に対する調査の分析であり、教員の生の声を扱ったものではない。生徒に対する成果に注目が集まるのは当然ではあるが、教育活動のもう1つの重要な構成要素である教員がどのように SGH 事業に対応したか、教育に対する意識の変化や資質・能力の向上の認識などを知ることは、今後の教育改革に対しても重要な示唆が得られると考える。

1. 研究の方法と対象

(1)分析手法

上記の問題意識・研究目的より、本稿では、教員が SGH への指定にどう対応したのか、その教育力や意識にどのような変化があったかについて検討する。そのために、「SGH 指定への教員の対応とその結果」を分析テーマとする。具体的には、(1)SGH に指定されてどのような変化があったのか、(2)そのことについてどのように対応を行ったのか、(3)SGH の教育プログラムを実施した結果をどのように受け止めたのかを明らかにする。

分析の手法としては、木下康仁の M-GTA による質的分析を援用する⁶⁾。M-GTA は、グレイザー (Glaser, Barney G.) とストラウス (Strauss, Anselm L.) によって提唱されたグラウンデッド・セオリー・アプローチに修正を加えたもので、データに密着した分析から理論を生成する研究方法として知られている。データの切片化を行わずに概念生成を行い、「研究する人間」の視点を重視して解釈的にカテゴリーを生成していく方法を採用。調査対象者の認識・感情・行動といった生のデータから理論の生成を可能にするもので、社会的相互作用やプロセスの解明、行動予測などに有効な手法とされる⁷⁾。

M-GTA の教育領域での有効性については、既に先行研究⁸⁾で紹介されているので本稿では省略し、本研究が M-GTA を研究方法として採用することが適切である理由を以下に提示する。第1に、研究対

象である SGH 事業の教育プログラムは、当然ながら生徒同士、教員同士、生徒と教員との関わりの中で実施されるものであり、それらの相互作用の中での教員の変化を捉えようとするものである。したがって社会的相互作用にかかわる研究であると位置づけることができる。第2に、本研究では、SGH 指定への対応を通して、生徒を意識して教員が教育方法や実施・運営体制の工夫や改善を行おうとするプロセスに着目するものであり、プロセス的性格を有しているといえる。第3に、これらの分析を通して、教員の新しい教育プログラムに対する思考や行動の変容プロセスを明らかにし、その理論化を試みるとともに、それが教育実践ないしは学校経営へとフィードバックされ、教育現場で活用されることを目的としている。よって、本研究は教育および教育経営改善の理論生成と実践支援を同時に目指すものである。

(2)分析に用いるデータ

本稿の分析に用いるデータは、SGH 指定校に所属する教員に対して行った半構造化インタビューの録音データである。インタビュー調査自体は、教員に加えて、生徒（調査時点）、卒業生に対しても行った。対象校は SGH 指定校2校（公立1校、私立1校）である。以下「A校」「B校」と表記するが、学校が特定されることを避けるため、どちらが公立校か私立校かはここでは言及しない。調査の実施概要は下記の通りである。

A校 調査日：2018年12月8・11・14日、2019年1月11・25・29日、2月13日、3月6日

場所：A校 調査対象者：同校教員26名、生徒（当時）22名、卒業生12名

B校 調査日：2019年2月7・8・20・21日

場所：B校 調査対象者：同校教員14名および生徒17名

教員に対する主な質問項目は、両校共通で以下の通りである。

- ・ SGH に指定されて、生徒に変化は感じられるか。それはどのようなものか。
- ・ 教員自身に何か変化はあったか。他の教員に何か変化は感じられるか。それはどのようなものか。
- ・ SGH に関わってみて良かったこと／得られたものは何か。
- ・ SGH に関わって困難を感じたこと／辛かったことは何か。
- ・ 困難等をどのように克服したか。克服できていないことはあるか。

分析は木下康仁による M-GTA の手順に倣い⁹⁾、上記インタビュー調査において聞き取った録音データの文字おこしを行い、データ内にある記述を参照し、オープン・コーディングにより概念（発話内容の趣旨・要点）を生成し、概念ごとにワークシートに記入した。ワークシートには概念名、概念の定義、具体例（バリエーション）、理論的メモを記載した。ワークシートはA校については54枚、B校については33枚作成されたが、概念の不成立、統合、修正の結果、最終的に成立した概念数はそれぞれ25と24となった。

次いで概念の対極例・矛盾例の有無をチェックし、恣意的・操作的解釈の回避を行った。全ての概念

について具体例、対極例、矛盾例が無いこと、新たな概念の生成の可能性が無くなったことを確認し、理論的飽和に達したと判断した。そして概念間の関係性を検討し、関連性の強い概念を包括的に表現するサブカテゴリー、さらに関係するサブカテゴリーおよび概念を包括的に表現するカテゴリーを作成した。A校についてはサブカテゴリー数6、カテゴリー数5、B校についてはサブカテゴリー数6、カテゴリー数4となった。最後に概念、サブカテゴリー、カテゴリーの関係性を示す概念図を作成し、ストーリーラインをまとめた¹⁰⁾。以下、各校についての分析結果を示す。

2. 教員調査の分析結果

(1) A校の教員調査の分析

1) 抽出された概念とその定義

A校教員の発話からは以下の25の概念が抽出された。概念名とその定義は以下の表1の通りである。欠番があるのは分析の過程で成立しなかったものがあるためである。

	概念名	概念の定義
概念 1	SGHに対する不安	SGHに指定された時に、それに対する不安があった。
概念 2	SGHに対する期待	SGHに指定された時に期待感があった。
概念 4	生徒の進路への影響	SGHの取り組みが生徒の進路に影響を与えることがあると認識している。
概念 5	生徒の積極性 やる気の上昇	SGHの取り組みにより生徒たちの積極性ややる気が向上したと感じている。
概念 6	相互の理解	SGHに取り組みすることで相互 教員同士、生徒同士、教員(生徒間)の理解が進んだ。
概念 7	実施体制上の課題	SGHの実施体制に課題があると感じている。
概念13	時間の不足	SGHの活動と通常業務とをこなす時間が不足している。
概念15	教員自身の成長	SGHの取り組みを通して教員自身も勉強して力量を向上させたいと考えた。
概念17	生徒にとって重要な機会	SGHの様々な取り組みは生徒たちにとって重要な機会だと考えている。
概念18	教員の勉強になる	SGHの取り組みは教員にとっても勉強の機会である。
概念19	生徒の良いところを見る	SGHの取り組みを通して生徒の良いところが見られる。
概念20	教育上の工夫	SGHの取り組みの中で教育上の工夫をしている。
概念22	教育上の行動・意識の変容	SGHの取り組みに影響を受けて教育活動に関する行動や意識の変化がある。
概念23	指導や評価の難しさ	SGHの取り組みの中で指導や評価の難しさを感じる。
概念24	他の教員の協力	SGHの取り組みを行う中で他の教員の協力が助けられる。
概念26	生徒の意識の変化	SGHの取り組みにより生徒の意識の変化を感じている。
概念28	機会の増加	SGHに指定されてから様々な機会が増えている。
概念30	生徒の視野の広がり	SGHの活動を通して生徒の視野の広がりを実感している。
概念32	生徒の負担	SGHの取り組みにおける生徒たちの負担の大きさを感じている。
概念41	二極化	教員も生徒もSGHへの関わり度合いが二極化している。
概念44	外部との関わり	SGHに指定されたことで外部との関わりが増えたのは良いことだ。
概念46	教員に関わる課題	教員が変化を好まないことがSGH推進の難しさだと認識している。
概念48	SGHは良い機会	SGHは良い機会だと認識している。
概念53	計画性の不十分さ	SGHの取り組みにおいて計画性が不十分で、急な話が出てくることが多い。
概念54	教員の負担増	SGHに指定されてから教員の負担が増したと感じている。

各概念は複数のインタビュー対象者の発話から生成されているが、紙面の関係上すべての概念について具体例を紹介することができない。そのため、以下に概念1〈SGH に対する不安〉を例として、その内容と概念の生成のもととなった具体例の一部を示しておく¹¹⁾。

〈SGH に対する不安〉とは、「SGH に指定された時に、それに対する不安があった」するものである。具体例は以下の通りである。末尾の（ ）内は整理用の教員番号である。

- ・今以上にやるが増えちゃったら、大変やんなっちゃうのがあったんですよね、今でもまだやりきれてないのについていう。(A2)

・ えーそんなんどないしてするんやろ (...中略...)。どないしてそれを生徒の方にフォローして行ったらよいかなあ、みたいな。(A21)

2) カテゴリーおよびサブカテゴリー

A校の教員調査の分析の結果生成されたカテゴリー、サブカテゴリー、概念およびそれらの関係性を図示した概念図は下掲の通りである。概念および関係性は、複数の調査対象者に共通したもののみを抽出した。図中でカテゴリー名は【 】, サブカテゴリー名は[], 概念名は< >で表現されている(以下の記述においても同様に表記する)。図中の矢印はカテゴリーやサブカテゴリー、場合によっては概念の間の関係性を表している(詳細は後述)。

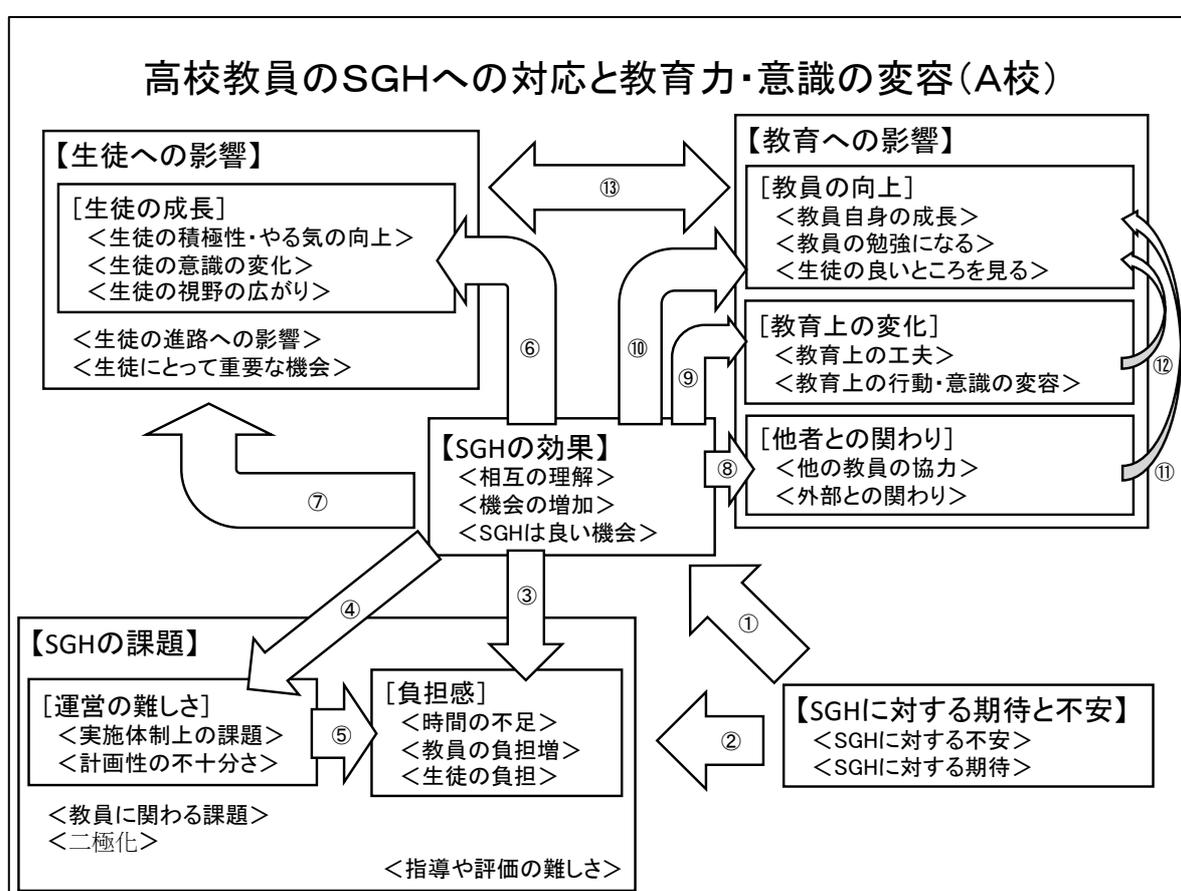


図1. A校教員調査分析の概念図

生成されたつ5カテゴリーは、【SGHに対する期待と不安】、【SGHの効果】、【SGHの課題】、【生徒への影響】、【教育への影響】である。本来であれば、各カテゴリーの内容について記述の具体例(ヴァリエーション)を用いながら説明するところであるが、紙面の関係から省略せざるを得ない。そのため、表1にある概念の定義を参照しながら、以下の説明をお読みいただきたい。

【SGHに対する期待と不安】: SGHの指定を受けて、教員の間では<SGHに対する期待>と<SGHに対する不安>があった。

【SGH の効果】：SGH の指定による様々な<機会の増加>、既存の活動のブラッシュアップや新規活動を通しての<相互の理解>といった【SGH の効果】がみられる。とりわけ生徒たちにとって<SGH は良い機会>だと認識されている。

【SGH の課題】：教員は、[運営の難しさ] (<実施体制上の課題>や<計画性の不十分さ>)、[負担感] (<時間の不足>、<教員の負担増>、<生徒の負担>)、<教員に関わる課題>、教員や生徒の<二極化>といったいくつかの【SGH の課題】を認識している。また、教育活動の場面では<指導や評価の難しさ>も感じている。

【生徒への影響】：SHG の取組は正方向での (ポジティブな) 【生徒への影響】があり、<生徒にとって重要な機会>であると教員は考えている。とりわけ<生徒の積極性・やる気の向上>、<生徒の意識の変化>、<生徒の視野の広がり>といった [生徒の成長] への影響や、<生徒の進路への影響>があると、教員は認識している。

【教育への影響】：SGH の取組は【教育への影響】があると教員は考えている。それは<教員の勉強になる>とともに、<生徒の良いところを見る>こともでき、また <教員自身の成長>の必要性を感じることもなり、[教員の向上] につながっている。さらに、<教育上の工夫>が行われるようになり、<教育上の行動・意識の変容>も生じており、[教育上の変化] が起こっている。これらは [他者との関わり] (<他の教員の協力>や<外部との関わり>) から生じることもある。

3) 各カテゴリー等間の関係性

次に、概念図にある矢印の意味を説明することにより、各カテゴリー等間の関係性を示したい。矢印は各カテゴリー等を結びつけた発話が複数存在することを示している¹²⁾。本来であれば、各矢印の説明について該当する記述の具体例 (ヴァリエーション) を用いながら説明するところであるが、やはり紙面の関係から全てを紹介することができない。そのため、矢印①についてのみ具体例を示しながら説明し、矢印②以下は説明のみを記することとする。

矢印①：SGH に採択された時には【SGH に対する期待と不安】が入り交じっていたが、実際に始めてみると様々なメリットがあることが分かる。【SGH の効果】を実感し、指定されたことを肯定的に捉えている。具体例としては、実施前に不安を感じていた教員 A5 は「忙しくなるのかなとか、正直に思いました」と語っていたが、実施後については「行事はすごく SGH 関係のこと増えたんですけども、それはまあ、いい機会というか、そうやったなとすごく思うんです」と述べている。また、SGH の指定に期待をしていた教員 A11 は「採択された時は、何かこう大きく動くかなと、当初は一千いぐらの予算がついてたと思うので、ちょっとわくわくはしました」と語っており、実際に実施してみると「いや、色んなお話が聞ける機会が増えたなど。それはもう圧倒的に増えた気がするんで、なかなか、SGH の名前が無かったらこうもできへんかったかなあと。で皆さんも『SGH 関連で』っていうと『ああ〜』と受け入れて下さるので。教職員が。それはよかったなと思いますけど」と期待通り

であった事を述べている。

矢印②～⑤: SGH に採択された時に【SGH に対する期待と不安】があったが、実際に始まってみると、多くの【SGH の課題】に直面する (矢印②)。【SHG の効果】は感じつつも、[運営の難しさ] や [負担感] を感じている (矢印③④)。特に [運営の難しさ] は関係者の [負担感] につながっている (矢印⑤)。

矢印⑥⑦: 【SGH の効果】は、正方向での様々な【生徒への影響】があると教員は感じている (矢印⑦)。特に [生徒の成長] に良い影響があったと実感している (矢印⑥)。

矢印⑧～⑫: 【SGH の効果】は、様々な正方向での【教育への影響】があると教員は感じている。それは [他者との関わり] の増加による視野・可能性の拡大 (矢印⑧) や教員個人の [教育上の変化] (矢印⑨) に、またこれらの間接的な作用も受けながら [教員の向上] につながっていると実感している (矢印⑩⑪⑫)。

矢印⑬: 【生徒への影響】と【教育への影響】の間には相乗効果がある。[生徒の成長] が教員のやる気のもとになり、かくして教員が頑張ることが [生徒の成長] につながっている。

4) ストーリーライン

以上の分析結果をストーリーラインとして要約すると、以下のようになる。教員は、SGH に指定された際に期待と不安を抱いていた。SGH 事業が始まると、これまでの教育活動に加えて、様々な学習機会が増え、それによって相互の理解が進む。その一方で教員は、様々な機会の増加により、多忙化や二極化などの課題が生じていると認識している。それでも多様な学習機会は生徒たちに良い影響があり、その成長を実感している。さらに、教員が新しい教育方法を取り入れたり、様々な工夫をしたりしており、SGH は教員の資質・力量の向上に対しても正の効果がある。

(2) B校の教員調査の分析

1) 抽出された概念とその定義

B校教員の発話からは以下の24の概念が抽出された。概念名とその定義は以下の表2の通りである。各概念はA校の分析と同様の方法で抽出している。

2) カテゴリーおよびサブカテゴリー

B校の教員調査の分析の結果生成されたカテゴリー、サブカテゴリー、概念およびそれらの関係性を図示した概念図は下掲の通りである。概念および関係性の抽出法、図中の表記法はA校の場合と同様である。生成された4カテゴリーは、【実施前の期待と不安】、【SGH における困難】、【SGH への対処】、【SGH の効果】である。以下、各カテゴリーの内容について、A校と同様の方法で説明する。

表2 B校教員の発話から抽出された概念

概念名	概念の定義
概念2	将来との結びつき
概念3	SGHへの期待
概念4	教員の変化
概念9	生徒の良い所
概念10	サポート的な指導
概念11	指導方法の難しさ
概念13	生徒の良い反応
概念15	生徒の成長
概念16	自分の教育への影響
概念17	自分の勉強
概念18	教員の温度差
概念19	自分の向上・進化
概念20	受験勉強と探究的学習の両立
概念21	活動の楽しさ
概念22	生徒の負担
概念23	外部との関係
概念24	指導の工夫
概念27	もどかしさ
概念28	教育効果のある活動
概念29	SGHに対する不安
概念30	教員間の協力
概念31	やってみて分かる
概念32	生徒の姿勢・人間関係
概念33	物理的条件の不十分さ

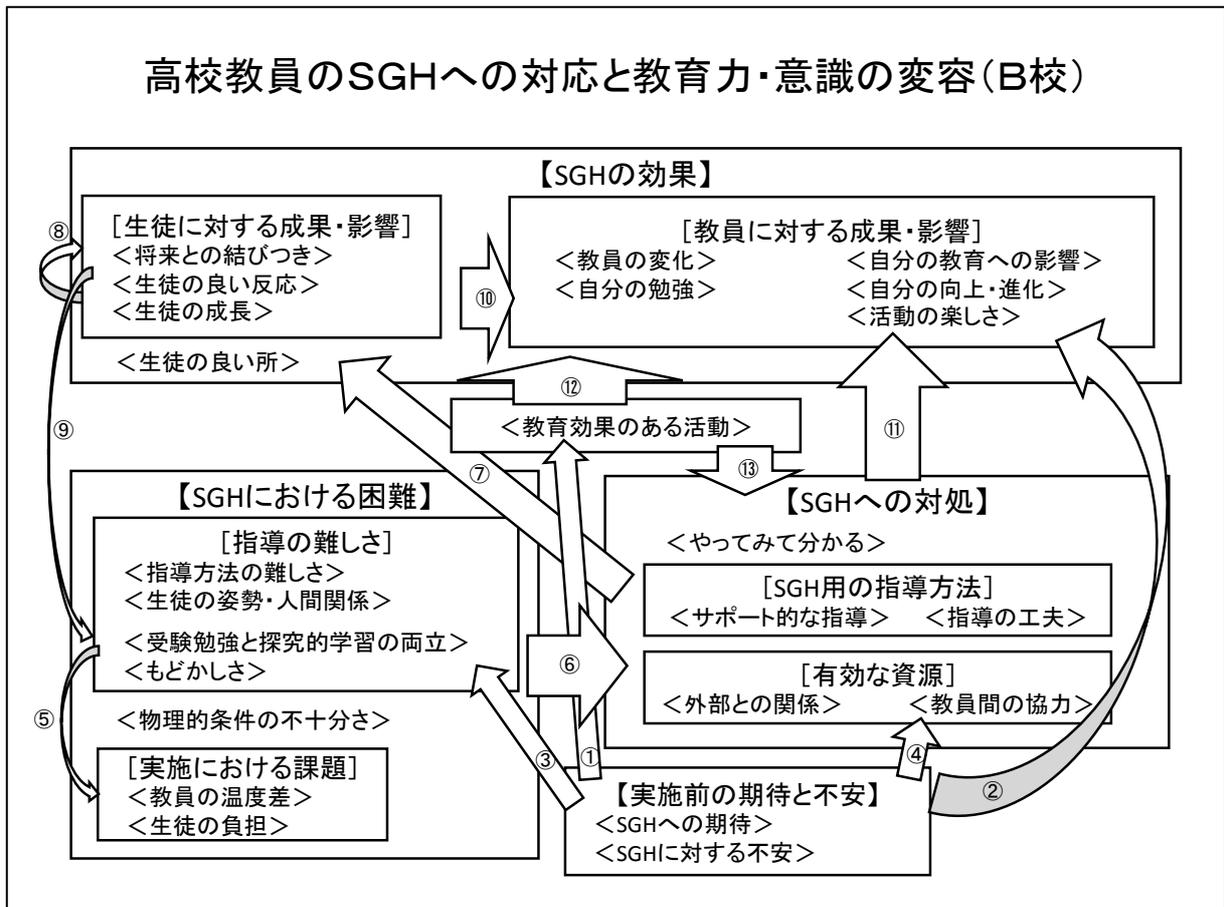


図2. B校教員調査分析の概念図

【実施前の期待と不安】：SGH の指定を受けて、教員の間では実施前に<SGH への期待>と<SGH に対する不安>が入り交じっていた。

【SGH における困難】：SGH の取組を進める上で、教員は [指導の難しさ] (<指導方法の難しさ>、<生徒の姿勢・人間関係>、<受験勉強と探究的学習の両立>、指導しているの<もどかしさ>) を感じるとともに、[実施における課題] (<教員の温度差>、<生徒の負担>) も認識している。また、<物理的条件の不十分さ>も感じている。

【SGH への対処】：取組を進める上で、教員は【SGH への対処】を行っている。一方では [SGH 用の指導方法] (<サポート的な指導>、様々な<指導の工夫>) を試行錯誤しながら導入するとともに、[有効な資源] (<外部との関係>、<教師間の協力>) の開拓と活用を行っている。これらの取組には<やってみて分かる>こともある。

【SGH の効果】：様々な期待や不安、困難がありつつも、教員は【SGH の効果】を実感している。それは、1 つには [生徒に対する成果・影響] (生徒の<将来との結びつき>、<生徒の良い反応>、<生徒の成長>) であり、活動を通して<生徒の良い所>を見ることもできる。もう 1 つには [教員に対する成果・影響] (<教員の変化>、<自分の教育への影響>、<自分の勉強>にもなること、<自分の向上・進化>、<活動の楽しさ>) である。また、【SGH の効果】等の基底には、SGH 関係の取組が<教育効果のある活動>であるとの認識がある。

3) 各カテゴリー等間の関係性

次に、A 校と同様に、概念図にある矢印の意味を説明することにより、各カテゴリー等間の関係性を示したい。

矢印①～④：SGH に対しては【実施前の期待と不安】があったが、始まってみると<教育効果のある活動>であり (矢印①)、正方向の [教員に対する成果・影響] を実感する (矢印②)。同時にこれまでとは異なる教育を行う上での [指導の難しさ] にも直面したが (矢印③)、<教員間の協力>により対処していった (矢印④)。

矢印⑤：【SGH における困難】の主要なもの 1 つが<受験勉強と探究的学習の両立>であり、それが<教員の温度差>や<生徒の負担>といった [実施における課題] につながっている。

矢印⑥：教員は様々な【SGH における困難】に対して、[有効な資源] の活用や [SGH 用の指導方法] を編み出すことにより、対処しようと努力を重ねた。

矢印⑦～⑨：試行錯誤ながら【SGH への対処】をしたことが、正方向での [生徒に対する成果・影響] として表れている事を実感している (矢印⑦)。<生徒の成長>や<生徒の良い反応>が生徒の将来や

進路選択に結びついたり(矢印⑧)、それによって<受験勉強と探究的学習の両立>を達成したりしたケースもある(矢印⑨)

矢印⑩: [生徒に対する成果・影響]は教員の励みとなり、[教員に対する成果・影響]へとつながっている(矢印⑩)。教員の【SGH への対処】が、[生徒に対する成果・影響]を経由して、教員に対する正方向の効果を生み出している。

矢印⑪: 教員は試行錯誤しながら【SGH への対処】を行うことにより、自らの教育力が向上しており、[教員に対する成果・影響]を実感している。

矢印⑫⑬: 正方向での【SGH の効果】について、教員はSGH が<教育効果のある活動>であることが基底にあると捉えている(矢印⑫)。また、新しい指導方法を導入できたり、新しい教育資源を手に入れたりできたのは、SGH が<教育効果のある活動>であったからだと捉えられている(矢印⑬)。

4) ストーリーライン

以上の分析結果をストーリーラインとして要約すると、以下のようになる。教員は、SGH に指定された際に期待と不安を抱いていた。SGH 事業が始まると、教員は、未経験な教育プログラムの中で、指導や実施の難しさを強く感じる。受験勉強とSGH の活動との両立や生徒の将来への思いの違いは、教員間の温度差の一因となっている。しかし、様々な工夫や協力をしたり、活用可能な資源を用いたりして、試行錯誤しつつ活動に取り組む。その結果、生徒の成長・変化・良さを実感し、SGH の成果・影響を感じている。これらは教員の充実感や動機付けにもなっている。SGH に関わる様々な困難を克服する試みは、教員自身にとっても学ぶ機会であり、授業方法の変更やその必要性、教員のさらなる資質・力量の向上およびその必要性を認識するようになっている。

3. 考察

以上、SGH 指定校2校について、教員のインタビュー調査の分析を行ってきた。設置者、生徒の進学先、その他属性が大きく異なる両校ではあるが、分析結果には共通する事項も多かった。第1に両校の教員とも当初SGH 事業に対する期待と不安があった点、第2に生徒の意欲向上や成長を実感している点、第3に教員個人レベルの工夫や教育方法の変化、教員間の協力も見られる点、第4にSGH 事業を教育効果の高い活動と受け止めている点である。

SGH の活動が実際に始まってみると、期待通りに生徒に対する教育効果が見られただけでなく、教員に対する正方向の効果も現れた。さらには、教員が生徒のために様々な工夫や試行錯誤を行って尽力することで生徒がいっそう成長し、逆に生徒の活動の様子や成長を実感することが教員の励みになるという相乗効果も見られる。その一方で、SGH の活動において、教員は様々な困難や課題に直面する。SGH に対する教員の温度差・二極化は両校に共通の課題であったし、これまでとは異なる教育方法に困難を感じることもあった。これらに対し、話し合いをしたり、様々な工夫をしたりすることにより、何とか対応しようと状況の打開を試みている。課題や困難は完全には克服されたわけではないが、教員

間の協力や新しい教育方法の導入など教員に対する正方向の効果も看取される。また、SGH の活動に対応するために新しい教育方法を試し、それを自らの授業でも応用する教員もいるなど、教員個人の成長につながっている面もある。そして、これら生徒および教員への効果は、SGH が教育的効果の高い事業であるからこそ生じていると、教員は受け止めている。

このように、SGH に指定されたことにより、一方では、教員が新しい取組に対応を迫られ、そのための新しい教育方法を必要とする側面が見られる。いわば外圧による変化であり、外発的動機付けと位置づけられる。他方では、生徒が SGH の活動に取り組む様子やその成長をみて、それが刺激となったり、教員のやる気を喚起したり、時に心の支えとなったりしている側面もある。こちらは内発的動機付けと位置づけることができよう。SGH 指定による教員への直接的効果（外発的動機付け）と、生徒の変化や成長を通しての間接的効果（内発的動機付け）とをそこに見出すことができる。

結

上に示した教員の教育力・意識の変容の多くは、まずもって SGH に指定されたことがきっかけとなっている。従前とは異なる状況に身を置くことになり、個人差はあるもののそれへの適応が行われている。本稿では紙面の関係で取り扱わなかったが、生徒および卒業生に対する調査から、SGH の活動が様々な次元で直接的・間接的に生徒の成長や将来に正方向の影響を与えており、そのことが教員の教育力・意識の変容につながっている面もある。とりわけ、生徒の成長を介しての教員に対する事業の効果を示した点は、先行研究では明確に示されていなかった本稿の成果といえよう。

このような教員の成長や資質・力量の向上は、学校全体として成長・教育力の向上にもつながり得るものである。さらに、公立学校の場合は、教員の異動による成果の普及も期待される場所である。しかしながら、これらの可能性や期待がより確実に現実のものとなるには、いくらかの運営上の工夫や仕掛けが必要である。この点についてはさらに検討を要するが、本稿における作業から以下の2つの方向性が示唆される。1つは生徒の成長が教員に対して内発的動機付け的に作用することから、教員が生徒の成長をより強く認識できる仕組みを作ることである。この点を強化することで、取組へのより積極的な教員の姿勢を喚起できる可能性がある。いま1つは、教員間の温度差や二極化を生じやすい一方で、活動を通して相互理解が進む側面もあることから、教員同士で前向き・積極的に話し合いができる組織・運営体制を工夫することである。そのためには、現場での推進役のミドルリーダーと、それを的確にサポートする管理職の力量が求められよう。

最後に、本稿の限界・課題と展望を述べておきたい。本稿では SGH 指定校2校の教員調査の分析を行い、両校に共通してみられる要素を中心に分析を行ったが、相違については十分に言及することができなかった。発話内容の違いを安易に学校の違いだけで説明してしまうのは適切ではなく、相違の解釈については慎重に行う必要があると考える。また、本稿は紙面の関係から分析を教員調査に限定した。平行して実施した生徒および卒業生調査の結果との関係についても、今後考察を行っていきたい。これらの点については、稿を改めて検討したい。

註

- 1) 高見茂「教育行政の概念」高見茂・服部憲児編著『教育行政提要（平成版）』（協同出版、2017年）20-21頁。
- 2) 国レベルの動向については、森田正信「教育行政におけるEBPMの取組状況について」『教育行財政研究』第46号（2019年）、25-30頁が参考になる。
- 3) 川崎将男・木野泰伸・朱藝・椿広計・永井裕久・ベントン キャロライン ファーン『高校生のグローバル関心とSGHについての意識調査報告書』（2016年）。
- 4) 野田正人「研究開発校事業の学校改善への効果の定量的調査—スーパーグローバルハイスクール事業からの検討—」『教育行財政研究』第44号（2017年）。
- 5) SSHの成果に関する総合的研究としては、小林淑恵・小野まどか・荒木宏子『スーパーサイエンスハイスクール事業の俯瞰と効果の検証』（2015年）が挙げられる。
- 6) 木下康仁『ライブ講義 M-GTA』（弘文堂、2007年）、木下康仁『質的研究の記述の厚み』（弘文堂、2009年）。
- 7) 木下康仁『グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践』（弘文堂、2003年）、橋場論・小貫有紀子「学習支援活動に携わる学生スタッフの変容プロセスに関する探索的研究」『名古屋高等教育研究』14（2014年）、279-298頁、畑中大路（2012）「M-GTAを用いた学校経営分析の可能性—ミドル・アップダウン・マネジメントを分析事例に—」『日本教育経営学会紀要』54（2012年）、76-91頁。
- 8) 橋場論・小貫有紀子、前掲書、畑中大路、前掲書。
- 9) 木下康仁、前掲書（2007年）。
- 10) ここでの分析手順の説明等は、主として橋場論・小貫有紀子、前掲書の書式に則った。
- 11) M-GTAにおいては、必ずしも発話数によって概念の成立・不成立が決まるものではないが、各概念の発話数、発話者数を参考として以下に示しておく。

概念別発話数・発話者数 (A校)																										
概念番号	#1	#2	#4	#5	#6	#7	#13	#15	#17	#18	#19	#20	#22	#23	#24	#26	#28	#30	#32	#41	#44	#46	#48	#53	#54	
発話数	15	10	3	16	7	17	17	10	4	20	5	12	32	8	4	14	8	10	7	4	7	5	7	12	11	
発話者数	14	10	3	9	4	7	12	8	4	15	5	8	12	6	4	10	7	7	5	3	4	3	4	8	10	

概念別発話数・発話者数 (B校)																								
概念番号	#2	#3	#4	#9	#10	#11	#13	#15	#16	#17	#18	#19	#20	#21	#22	#23	#24	#27	#28	#29	#30	#31	#32	#33
発話数	7	8	6	8	7	7	10	25	18	12	11	17	9	3	3	10	12	6	11	6	7	3	8	10
発話者数	5	7	4	7	5	4	7	12	10	8	7	10	4	3	3	6	8	4	7	4	4	3	4	6

- 12) 図中に用いられている矢印の方向は、調査対象者の発話に見られるカテゴリー等間の関係性であり、発話者の認識における因果関係を示すものである。矢印の太さは概ね関係する発話数の多さを示しているが、それと実際の因果関係の強さとの関係は慎重に検討する必要がある。また、太めの（関係する発話数の多い）矢印であっても、それが全ての調査対象者の発話に必ず見られるものではない。

【謝辞】本研究に協力いただいた全ての関係者の皆様に御礼申し上げます。

I would like to thank Editage (www.editage.com) for English language editing.

Response of High School Teachers to the Super-Global High School Project and Changes in Educational Ability and Consciousness

Kenji HATTORI

Recently, Japan has adopted a performance-based approach to its education policy, and the achievement level of educational programs is evaluated using quantitative numerical targets. However, educational outcomes are not limited to quantification. This paper thus aims to clarify educational outcomes that are difficult to grasp numerically. For this purpose, it used qualitative analysis methods for the Super Global High School (SGH) project, from multiple perspectives, taking into account the process. Considering an interview survey of 40 teachers from two SGH-project-designated schools, the author examined how the teachers responded to it and what kind of changes were observed in the educational ability and consciousness of the teachers.

The interview analysis led to the following four findings:

- (1) Teachers initially had expectations and experienced anxiety in connection with the SGH project.
- (2) Teachers were feeling the motivation and growth of students through the SGH project.
- (3) Through the SGH project activities, ingenuity and changes in educational methods at the individual teacher level, as well as cooperation among teachers, can be seen.
- (4) Teachers regard the SGH project as an activity with a high educational effect.

Teachers can exhibit changes due to direct or indirect factors. The former change is caused by the fact that high schools have been designated as SGH, and teachers must learn new teaching methods. The latter change is caused by the teacher seeing the transformation and growth of the students, which motivates the teacher to actively try new things.